

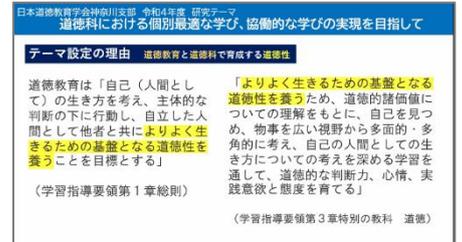
日本道德教育学会神奈川支部 道德フォーラム2022（令和4年4月24日）

今年度支部研究テーマについて

Society5.0の時代である現代、IOTをはじめ社会の在り方も変化している。今までに新たな時代に移行している。また新型コロナウイルスの感染拡大など、予測困難な未来に対して新しい価値の創造は必要不可欠である。



- ・多様な人々と共に生きる
- ・未来を切り開き生き抜く力
- ・自分のよさや可能性
- ・持続可能な資質・能力



【今年度のテーマ】

「道德科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して」

道德性を育む一方、令和の日本型学校教育の中で示されている「個別最適な学び」「協働的な学び」に注目しテーマの解釈、授業実践、子どもの見取り、理論路実践の往還を中心にしながら、道德における個別、協働の在り様を考えていく。

研究実践発表①

「道德の授業における私の個別・協働のとらえ方」(支部会員 綾瀬市立綾西小学校 吉田雄一教諭)

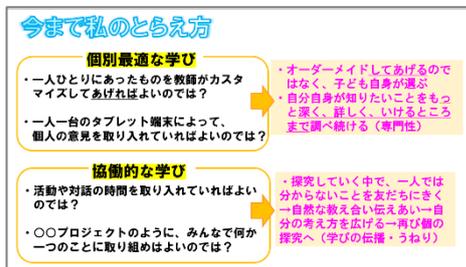
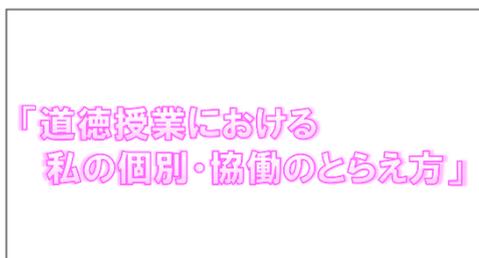
○提案者の個別・協働のとらえ方

(個別最適な学び) △教師が子ども一人ひとりに満足するものをカスタマイズする。

→○一人ひとりが自分の・自分自身が知りたいことを深く、詳しく、専門的に考え続ける。

(協働的な学び) △対話的活動、プロジェクト活動を行う。

→○一人では分からないから友だちにきく、自然な教え合い伝え合い、学びの伝播が生まれる。



○個別最適のヒントとなった授業

「3年理科の風とゴムの実験」

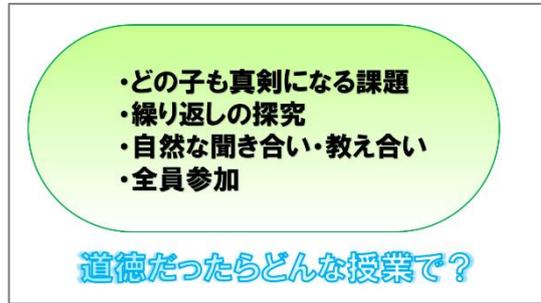
- ・どの子も真剣になる課題
- ・自分に合った実験方法の選択
- ・繰り返しの探究
- ・自然な聞き合い・教え合い
- ・全員参加 といった姿が見られた。このような姿は道德科の授業でも取り入れられるのでは？

○道徳授業における個別・協働のポイント→「問い」だと考える

- ・「問いの質」を変えてみる。
- ・一人一人が考えて、みんなに聞きたくなるような問いにする。

例)「なぜ勉強するの？」

- ・大人も子供考える、人によって答えが違う。他の人の意見を知りたくなる問いを考える。
- ・登場人物の心情や、場面設定を飛び越える問いを考える。



○実際の授業「友だち屋」

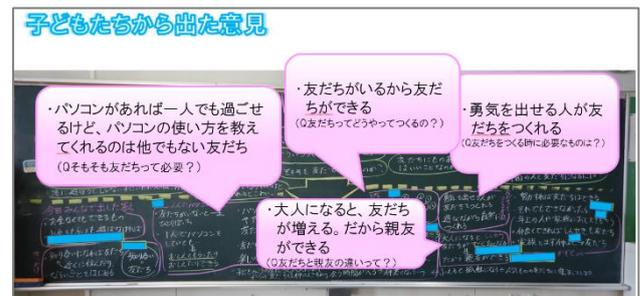
「友達のつくり方って何だろう？」という問いを設定 ←身近でありながら意外と答えが分からない

(授業の流れ)

- ①問いからさらに個人の問いをつくる (個別)
- ②クラス友だちの問いをきいて、さらに自身が深めたいことを整理する (個別)
- ③グループで、話すことで新しい答えを知る (協働)
- ④別のグループの話聞いて新しい答えを知る (協働)
- ⑤今日学んだことの再構成をする (個別)

45分の中で疑問を持ち続け更新していくことで学ぶサイクルが生まれる。

個人の思考→全体共有といった流れは今までの授業とは変わらないが、「問いの質」を変えることで授業者の意識を教材の外側に向けていく。



○質疑応答

(参会者Q) はじめに子どもから問いを出すのにどれくらいの時間がかかるか。

(提案者A) 教材を読みながら、子どもたちから突っ込みが出ていた。その後の問も割とすぐに出た。問いが自分の生活場面にどれだけ近いかが大切である。今回たまたま教材が子どもたちにとって身近だったといえる。毎回このように「問いを問いにする授業」をするのではなく、子どもの実態と合っている時に取り入れるとよいのではないか。

(参会者Q) 今回のような発問はどのようにつくっているのか。

(提案者A) 教科書を見た時、写真だけの教材というものもある。なぜそれがこの教科書に載っているのかを考えるようにしている。教材の製作者の立場に、その伝えなかったことが浮かぶことがある。子ども

の実態に合わせて、登場人物の心、場面の設定を飛び越えるようにしている。

「友達のつくり方」のように子どもの生活あったもの、教材の良さ、内容項目それらが「なじんだ」発問にするようにしている。

(参会者 Q) 子どもたちが考えたい問いを選んでいく、その日の子供が選ぶものによって、授業展開が左右されるので。子どもの多様な問いを認めつつ、授業のねらいに迫っていくためにどのようにしているか。

(提案者 A) 学習のねらいに向かいたくなるように、授業の前段階で問いの言葉を吟味し投げかけるようにしている。ねらいを思わず考えたくなる、発問の言葉一文字一文字にこだわりながら、子どもの「想定外の意見」を楽しんでいる部分もある。

(参会者 Q) 個別→協働→個別…個人の中で視点が変わっていったが、グループでの問いの話し合いはどのように行われたのか。またどのように収束しているか

(提案者 A) 色々な問いが生まれている状態の中で、「話したいこと」すべてグループの子供に委ねた。子どもがどの問いを選び、グループで何を話し合うかということを選ぶ中にリアリティがあると感じている。

(参会者 Q) 哲学対話に近いものを感じる。「友だち屋」という教材をどのような意図で扱おうと思ったのか。また、登場人物に自我関与する場合と、教材の外から考える場合はどのように使い分けているのか。

(提案者 A) 「友だち屋」のもつ教材の力はとても強いので扱いが慎重になった。しかし「友情」というテーマは「自分ごと」にできそうだと感じたため、今回の授業で取り入れることにした。
子どもの発達段階によって、発問の質を変えている。4月当初であれば教材にどっぷりつき、登場人物の心情や、場面設定から深く考える発問にする。しかし発達段階によって、子どもの知りたいことが文章に書いていること以上のことを考えたくある時がある。当時3月の子どもの発達段階、や、その時子どもたちが知りたいところに合わせて今回はこのような問いを設定した。

(参会者 Q) 問いを広げ、自由に考える一方、問いを絞っていくことも必要だと考える。子どもの意見が、ただ広がって終わってしまうことがある。それに対してどのようなことに気をつけているか。また子どもたちが話し合える学級風土をつくるうえで大切にしていることはなにか。

(提案者 A) 難しいことではあるが、「子どもがどんなことを言っても、教師がねらいとの関連を価値づけること」ができれば、授業はまとまる。子どもが自覚していないことを、教師がすごいことなんだと価値づけるようにしている。

また教師自身が日常生活の中で問いをもつことを楽しみ、子どもとの学習に戻していくことで、子どもたち同士が様々な問いを認め合える学級風土ができていくと感じている。

研究実践発表②

「生徒の『あこがれ』からスタートする道徳教育」(支部会員 岩手県盛岡市立上田中学校 山田将之教諭)



○学校全体で取り組む道徳教育の基本方針

- ・学校基本目標と関連した「心豊かに人生を幸せに歩く」という道徳教育のあり方について職員・生徒全体で共有している。

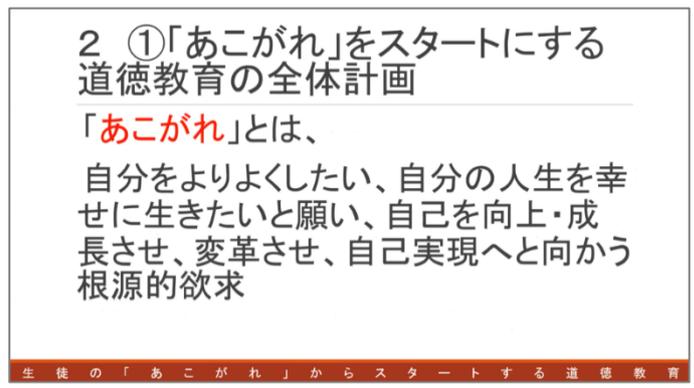
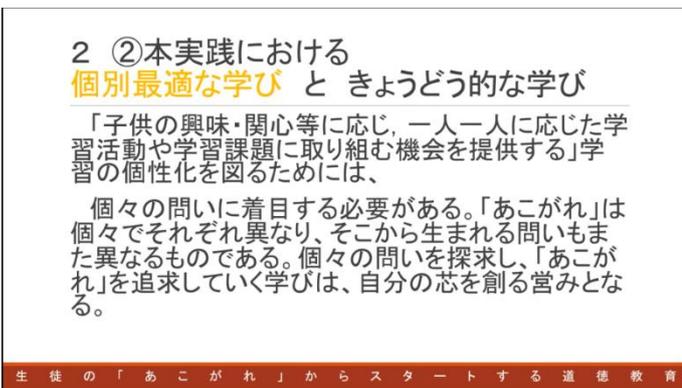
○ (Doutoku + quest) 道徳+探究

- ・主体性のカギとなるものは生徒一人ひとりが発する「問い」である。
- ・答えが一つではないこれからの時代を生きていく「自分の芯」(=納得解)をつくっていく。
- ・自分の納得解がしなやかな判断力につながると考える。
- ・一時間の授業の積み重ねだけでなく、年間のカリキュラムが大切である。
- ・生徒一人ひとりが年間の問いをつくる。
- ・生徒を授業の主体にする。



○心の原点である「あこがれ」をスタートにする道徳教育の全体計画

- ・幼稚園教育要領の「憧れ」、小中学校学習指導要領の「憧れ」→第三者的なあこがれ
- ・小学校低学年にとっての憧れは、偉人やスターなど第三者に対する憧れであるが、中学生では「生き方」に対する「あこがれ」を追究させたい。・ひらがな表記の「あこがれ」は、自己実現へ向かう根源的欲求と校内で定義し、学習指導要領上の漢字表記の「憧れ」と区別している。



生徒にアンケートをとって、重点内容項目をA-(4)「希望と勇気、克己と強い意志」、B-(6)「思いやり、感謝」とした。ここをスタートに個々の「あこがれ」に広げていく

○職員間での意識の共有

- ・各教科の教師で「あこがれ」のアプローチの仕方について話し合う。
- ・スタンディングミーティングをしながら、どんな実践をするかを話し合う。
- ・個別最適な学びの視点から、個々が追求してあこがれをつくっていく。

○実際の授業より

- ・道徳は何をする時間ですか→近くの人と相談する。
- ・おにぎりを例に「のり」の巻き方について議論する→答えは一つではない。これは道徳でもいえること。
- ・そういうこともあるんだなと違いを認める視点、正解がないことについて考える。
- ・愛とは「心で受け止めること」である。

3 道徳オリエンテーションの実際

- ①道徳って何をする時間？
- ②大切にしたいこと1
- ③大切にしたいこと2
- ④「あこがれ」を言葉にしよう
- ⑤1年間探求したい問いをもとう
- ⑥次回の予告

生徒の「あこがれ」からスタートする道徳教育

○一枚の写真から問いを考える（階段でおばあさんに手を差し伸べる高校生の写真）

- ・この二人の関係は？
 - ・おばあさんが階段を上った理由は？
 - ・なんで立ち止まっているの？
- 問いを考えると、より深く理由を考えられるようになる。答えを知りたくなる。
同じ写真でも見る人によって色々なことを考えられる。
まず子どもに引っかかりを持たせてから、教材を読むことで、「ああなるほどなあ」と思うこと答えが出る。

○「あこがれ」から生徒一人ひとりの自己実現へ

- ・「自分で自分を 美しく より美しく 染め上げて下さい」（サトウハチローの詩）
- ・「一年生はスタートライン、どんな中学生になりたいか、どんな自分になりたいか。」（道徳教科書より）
- ・「自分にうそをつかないとはどういうことか」「努力とは何なのか」→こどもの振り返りではあこがれに対して、一人ひとりが自分の中で新しい問いを持つことができた。

おわりに

令和4年度生徒会スローガン「愛と先へ」
（設定理由より）

- ・愛とは、共に認め合うことや認め合うことのできる環境を示す。
- ・前を向いて挑戦し、時にはこれまでの歩みを振り返ること。

「私たちだけのまだ見ぬ景色を求め、愛と先へ」

生徒の「あこがれ」からスタートする道徳教育

○質疑応答

（参会者Q）自分が生きるための選択など、小学生では無自覚だったものが中学生になると、自覚化されると感じた。これが提案のなかにある「自分の芯」なのだと感じた。「自分の芯」というものについてもう少し話を詳しく聞きたい。

また前向きな生徒が多く、活発な授業の印象を受けた。校内研究で取り組んでいる「あこがれ」や生徒会の「愛」というスローガンが前向きな生徒の育成に関連していると感じている。ここから生徒はどんな夢をもっているのか、将来のビジョンなどについてなにか生徒が語っていたことがあれば教えてほしい。

(提案者A) 誰もが自分をよりよくしたいという思いをもって、自分のあこがれについて118人全生徒が書くことができた。書いたものを読んでいくと目指す姿を自分の中にきちんともっているのだなと感じる。このあこがれを書くことができた時点で、そういった心の基礎をもっているんだと感じた。道徳教の授業でその気持ちを高めていった。

(参会者Q) なぜ道徳を学ぶか。ここに書いているからではなく、発表をきいて自分なりの答え、借り物でない自分の答えを持っていることが大切なのだと感じた。中学校で本音を引き出すコツを教えてほしい。

(提案者A) 先輩のやってきたことを参考にしている生徒が多い。誰かに憧れるのではなく、生き方に対するあこがれをもつ時、自分の芯の周りを取りまくものが更新されていると感じる。また教師はどの子が言ったことも「本音」であると受け止めるようにしている。何でも話せる雰囲気づくりをオリエンテーションの中でも伝えている。

(参会者Q) 提案は一年生の最初にオリエンテーションの様子だったが、3年生の最後はどのように授業をまとめているのか。

(提案者A) 各学期に振り返りがあり、追求していった結果、問いが変わることがある。また各学年で問いに対する現時点での自分の答えを振り返るようにしている。

(参会者Q) 「あこがれ」は大切なポイントだと感じる。あこがれをもつときに職員間での共有は大切だと感じる。先生が意識されていることは何か。

(提案者A) 全職員であこがれについて共有して研究に取り組んでいる。3年に2回の授業公開をすることで、モチベーションを高めるようにしている。授業のやり方や方法論の押し付けではなく、子どものあこがれを研究において一番優先にしているの、職員間での共有がしやすかった。

(参会者Q) あこがれをスタートにするという取り組みが、昔は〇〇だったのではなく、未来に向かってどうやっていくかウェルビーイングを意識したこれからの道徳授業づくりとして参考になった。今回提案されていたのは中学1年生だった。中学2年、中学3年ではどんなスタートを思い描いていくかを知りたい。

(提案者A) 中学2年3年でも見通しをもたせる。中学校2年生がせいが一番難しい、積極的に発言しなくても、自分の心の中でしっかりと意見を持っていることがある。2年生は幸せについて考える。夢に向かって生きていくことや受験と関係なく、自分を見つけていくことを道徳では大切にしたい。

.....

講演「個別最適な学びと協働的な学びを実現する道徳教育」

西野真由美先生(国立教育政策研究所 教育課程研究センター 総括研究官)

日本道徳教育学会神奈川支部
道徳フォーラム2022
2022年4月23日(土) 15:25-16:53

個別最適な学びと協働的な学びを実現する
道徳教育

 国立教育政策研究所
National Institute for Educational Policy Research
西野 真由美

「個別最適化された学び」から「個別最適な学び」へ

個別最適な学び ↔ 協働的な学び

それぞれの学びの**一体的な充実**
「主体的・対話的で深い学び」の表現に向けた授業改善

指導の個別化・学習の個性化

- 指導方法・教材等の柔軟な設定
- 自ら学習を調整するなどしながら、その子供ならではの課題の設定、子供自身による情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、**主体的に学習を最適化**することを教師が促す

- 〈知・徳・体を一体的に育む関わり合い〉様々な場面でのリアルな体験を通じた学びやICTの活用による他の学校の子供たちとの学び合いなど
- 学校ならではの協働的な学び合いや多様な他者と協働した探究的な学びを通じ、持続可能な社会の創り手として必要な資質・能力を育成

出典：中教審答申（2021）

6

○個別最適な学びの捉え

- ・令和答申の考え方を確認し道徳で実現していくためにどんなことを考えていけばよいか。
- ・当初は「個別最適化された学び」(アダプティブラーニング) という名称だった。しかし学びを最適にしていくのは子ども自身である。
- ・他者と協働しつつ、考えながら自立した学びを実現する。中教審で議論の結果「個別最適化された学び」から「個別最適な学び」へ変更。
- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的に充実させることを令和答申では提案されている。
- ・孤立的な学びになってはいけない。
- ・ICT活用は個別最適な学びよりも、むしろ協働的な学びの中で位置付けるイメージ。
- ・指導の個別化と学習の個性化。(学習の自己調整)
- ・個別と協働は「主体的・対話的で深い学び」と異なるものではなく実現するための背景にあるものである。
- ・公正に最適化された学び→多様な子供たちをだれ一人残さない。
- ・発言力の弱い社会的な弱い立場の子どもを守るための多様な学びを、学校で保証することでもある。

○個別最適な学びと協働的な学びの関係

- ・これら二つの学びを往還するという文言があるが、個別・協働は別々に存在しているわけではない。個別と協働には両方の要素が含まれていて一つの学びとしてとらえる。一体的に充実するものである。
- ・タブレットも一人一人が孤立する道具ではなく、協働で活動するための「道具」である。

○これからの学校教育のニューノーマル

- ・多様な学びを社会が認めていけるような教育の在り方(多様性と包摂性)
- ・教育現場の正解主義と、同調圧力からの脱却。
- ・教師と子供で勇逸無二の授業をつくっていく。
- ・多様性の承認は格差の承認ではない
- ・形式的平等ではなく、困っている人に役立つ実質的な手立てを考える。
- ・誰一人取り残さない 一人ひとりの居場所を学校や社会につくる。
- ・エデュケーション2030にも示されている「社会全体の中で学校教育をつくる」という考え方。
- ・「学びの場」としてのICT活用。ICTはコンテンツではなく新しい学習の環境の作り方と捉える。

道徳科における「一体的な充実」とは

- **キャリア（生き方）形成**
自分の生活やキャリア形成の方向性と関連付けながら、学習活動を振り返って学び意義を見出し、納得しながら、次につなげる学び
- **自己調整学習**
自ら目標をもち、何を学んだかを確認して自己評価し、軌道修正しながら、新たな目標へ向かう学び

↓

自分の問題意識を持って
考え、議論する

↓

個別最適な学びを協働の場で実現

出典：OECD Learning Compass

12

教育の未来：「ニューノーマル」

特長	従来型	ニューノーマル
教育システム	自己完結した全体	大きな「エコシステム」の中の一部（生態学的アプローチ）
責任と参画	管理職集団が決定し、責任を持つ。分業体制（管理職は学校経営、教師は教授、生徒は、教師に従って学ぶ）	ステークホルダー（保護者、職員、地域、生徒を含む）が意思決定と責任を共有する。協働で教育に責任を持つ。生徒自身も自らの学習に責任を持つことを学ぶ。
教育効果・質の向上	成果・成績主義	成果だけでなく、プロセスを評価。成績や到達度に加え、子どもの学習体験それ自体が固有の価値を持つ。学業成績だけでなく、子どもの全人的な幸福を重視する。
カリキュラムデザインと学習進度	線形・標準化 カリキュラムは、標準的な線形の発展モデルに従って開発される。	非線形の進展 (Non-linear progression) (子ども一人ひとり、それぞれの学習の道を持ち、学校生活のスタート時点から、それぞれ異なる既得の知識、スキル、態度を持っている)
子どもの役割	教師の指示に従いながら、自律性を成長させていく。	生徒自身の主体的な活動、仲間や教師らと主体的に関わりながら、積極的に参加する。

子どものニーズ、声、主体性、学習体験、ウェルビーイングをデザイン原理の中心に

出典：OECD (2020). OECD Curriculum (re)Design Table 1, p.9

3

○今後の授業づくりについて

- ・協働的、探究的な学びのなかに個別最適な学びを実現していく。
- ・多様な個性を發揮しながら、互いに問いを探究していく。
- ・個別⇔協働という二項対立に陥らない思考法。「二つをつないで新しいものをつくる」という発想
- ・自己調整という言葉→個人内だけでなく、協働的な学びの中で自己調整を図る。
- ・エージェンシー →変化を起こすために自分で目標を設定して行動する能力とされているが、本来は、「関りの中で育っていく力、いろいろな人や周りの人が支え合う中で育っていく力」を指している。
- ・キャリア調整と自己調整を授業の中で実現する。
- ・学級として探求する問い、その中で自分自身の問題意識をもって取り組む道徳授業が求められる。

育成を目指す資質・能力と実現を目指す学びの姿

育成を目指すべき資質・能力

- ◆ 自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成
- ◆ 変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力

子供の学び

多様な子供たちを誰一人取り残さない

- ・ ICT、先端技術を有効に活用することなどにより、一人一人の資質・能力を伸ばし、多様な子供たち一人一人の能力、適性に応じて、子供たちの意欲を高める
- ・ 特別な支援が必要な児童生徒等に対する個別支援の充実（特別支援教育・特定分野に特異な才能を持つ者に対する指導・支援）
- ・ 子供の生活や学びにわたる課題（貧困・虐待等）が早期に発見され、社会的少数者としての課題を有する児童生徒等を含めた全ての子供たちが安全・安心に学ぶことができる

学びを支える環境

- ・ 教師・多様な専門スタッフ・外部専門機関がチームとして運営する学校
- ・ 先端技術を活用できる環境整備
- ・ 学校における働き方改革

5

道徳教育のカリキュラム・マネジメント（学校の教育活動をつなぐ）

「二項対立の陥穽に陥らない」
どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていく
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

生活集団での学び合い
集団に共通の目標
「社会」としての学校
多様な体験活動
合意形成・協働問題解決

⇔

個人の能力・関心に応じた個別学習（教科）
学習課題に応じた柔軟な学習集団
学校外の多様な学習プログラム（大学、研究機関、企業、NPO、文化スポーツ施設等）
学びの履歴としてのキャリア・パスポート

学びの場の共有の中での個性化
協働の中で育む自己調整学習
コミュニティへ「拡張する学び」（地域連携で創る多様な学びの場）
社会参画と生き方学習を実現するキャリア教育

11

○授業実践より

「長なわ大会の新記録」（光村図書 3年生）

【あらすじ】

主人公は縄跳びの応援に夢中になってしまい、ストップウォッチを押し忘れ新記録が出てしまう。それをクラスのみんなに言うべきか葛藤する。

- ・ 予習として教材を読む。
- ・ 一人ひとりが問いをもって授業に臨む。
- ・ 子どもたちから出た個人の問いを大切にする。教師が考えた問いと、子どもが考えた問いの共通点を探す。

(子どもの個人の問い例)

どうやったら正直に言えるのか

明るい心で生活するにはどうすればよいか

なんで正直が大切なのか

主人公がこれからどうするかを知りたい

みんながうれしかったらうそをついてもよいのか

- ・これらの個人の問いが、集団で学習することで子どもの中でどのように変化するかをねらいとした授業実践である。

【授業の流れ】

(クラス全体で考える問いの確認)

「どうしたら正直な行動ができるのだろう」

- ・ストップウォッチを押し忘れたため新記録が出てしまったことを「だまっておくべきか」「正直にいうべきか」今の子どもの今の気持ちを問う。

(A児の答え)

「黙っていれば、ほかの人から攻められることもない。黙っておいた方がみんながうれしい。」

(教師の出処)

「登場人物の男の子でなく、教材の3年2組のみんなの立場から考えたらどうなのか。」

(A児の答え)

「それでも言わないほうがよい。君のせいで記録が下がってしまったといわれてしまう。」

(B児の答え)

「僕は言った方がよいと思う。本当にできたということにはならない嘘を教えるということになるから。もう一回すっきりやり直した方がいい。」 A児B児の異なる考え方。

(正直にいった時のロールプレイをすることで、どんな気持ちになるか実際に体験させてみる)

(クラスの児童の反応)

「たしかに3秒忘れていたことはよくないけど、夢中で応援していたからしょうがない、君のせいじゃない。」

「本当の実力の回数だからしょうがない。もう一度計ればいい。」

(正直にいった時の気持ちになったか整理する。)

- ・みんなの実力と言われたら仕方ないと思ってしまう。
- ・でも嫌だなという気持ちもある。
- ・正直に真実を言うことはドキドキする。
- ・しかし正直にいったことは決して悪いことではない。

(「明日へのプラスワン」これからの自分に生かす方法を考える。)

「何故主人公は正直な行動ができたのか、何がそうさせたのか？」

(子供の答え)

- ・自分で決める心決心があったから
- ・勇気と正直な心
- ・正義
- ・仲間に対する信頼、受け止めてくれるみんな
- ・みんなの喜んでいる心

など今まで学習してきた様々な考えが出てきた。唯一の答えは出なかったけど、葛藤する主人公の心を見つめることができた。

(A児の「明日へのプラスワン」)

自分は言わない方がよいという考えをもち続けながらも、授業を通して「正直に言うと嫌われることもあるかもしれないけど、みんなの心もすっきりとすることが分かった」という答えを45分の授業の中で出すことができた。

○まとめ

- ・クラス共通の問いの中で、自分の問いを追究していくことは可能である。
- ・全体で考える一つの問いの中に、自分の問を埋め込んでいく学習形態の可能性を提案した授業である。
- ・正直というテーマを通して、今までの学びの連続性を感じさせる。
- ・学校教育目標の実現させるために、パッケージユニットのようなテーマのある学習單元をつくることも有効。

「学び」の連続性をつなぐを創る	
■ 学校としての「重点」化	各学校が、子どもや地域の実情に応じて、重点化する内容や育成を目指す資質・能力を共有
■ 「テーマ」のある学習單元の構想	・内容項目間の関連を意識してひとまとまりの単元に ・道徳・特別活動・総合・教科の学びをつなぐ ・学校の特色を生かして「現代的な諸課題」に取り組む
■ 「振り返り」で学びを意味付け⇒次につながる問いを育む	・「この授業で何を学んだか」(感想ではなく変化に気付けるように) ・「これからの自分に生かしたいことは何か」(転移) ・「解決しなかったこと(もっと考えたいこと)は何か」

本校が大切にしたい
目標を共有

17

○質疑応答

(参会者Q) 正解主義からの脱却、多様性・包摂性の尊重といわれているが、新しいアプリの導入、学校行事、キャリアパスポートなど教員の業務が過多から、どうしても効率重視になってしまう部分があり悩みどころである。

(提案者A) 多様性と包摂性はこれからのめあてであり、それに向けて少しずつ変わっていくものである。全員で方向性を共有しながら、現実の実践で変えられるところから変えていくことが理想的である。「協働」とは違いを認め合うということであり、同質的な集団になるという意味ではない。もともと違って当たり前だけ一緒にやっていくという考え方。集団活動を乱しがちに見える子供も、社会的な少数者、学級としてどうやって学んでいくかを学級として話し合い考えていく。また職員も同様で、みんなのできることを一緒にやっていける学校の雰囲気をつくっていききたい。子供も職員も一人で抱え込まず話し合いながら、学校をつくっていくようにしたい。

(参会者Q) 子どもの動画をみて聞いている反応、「なるほど、ああ、確かに」といった反応も協働において必要だと感じた。「協働」と「協同」の違いをもう一度確認したい。なぜ今回の答申で「働」を重視しているのか理由を知りたい。もう一点は「公正」と「ユニバーサルデザイン」は反対の意味にも感じるがどのように関連しているのか。

(提案者A) 「協働」は人同士ではなく、異なる機関がともに働くという意味だった。「働」の字を使うことで「一人ひとりが違う」ということに焦点を当てるため。子どもに新しいものを教師が注入するという教育観ではなく、「もともと自分が持っている価値観や考え方」を認め、そこを出発点にし、そこから一人ひとり何かしらの変化が生まれるニュアンスが込められている。

ユニバーサルデザインに関しては、「無個性の誰しも」に発信したのではなく、少数者のために公正を実現し、その結果が社会の公正につながると考えている。ユニバーサルデザインには「形式的な平等ではない公正」の考え方があると思う。

(参会者Q) 授業実践の中で「どうしたら正直な行動ができるのだろう」というめあてがはじめにあったが、そうすると「正直なことが正しい」という前提で話が進められているのではないかと感じてしまう。どういう意図があったのか。

(提案者A) A児は個人の中で「みんながうれしかったらうそをついてもよいのか」という問いをもって授業に臨んでいた。このA児のように「正直にしないことがよいことはあるのか」という問い方もあると考えられる。しかし3年生という発達段階で、「正直」を真っ向から疑う問いの設定もどうかと考える。3年生の子どもたちのこれまでの経験を基本とすると「どうしたら正直な行動ができるのだろう」という問いの設定でもきちんと話し合いは深まると考えられる。これまでの経験を大切にしながら、正直について問い直し、それでもできないのは何故なんだろうという展開につなげていけると考える。中学生であれば「嘘をついてもよい場面」などについて議論することも可能かと思われる。

☆学級の協働の問いの中に、自分の問いを埋め込むこと、今後の授業に取り入れていく新しい授業の指針を示していただきました。学校や職員間でも新しい「学校」の在り方について考えていくきっかけとなる貴重な時間になりました。ご講演いただきありがとうございました。